札幌大学総合論叢　第一一号（二〇〇一年三月）

〈創作〉

ミュージカル『ペ　ケ　レ』

原子　修

（一）

原子　修

まっくら闇
シンセサイザーの音楽　神秘的にふりしきる
天空にまたたく星の光芒
ひと筋の流れ星
その光　みるみる強さを増し
やがて　世界全体を灼きつくすように輝き
七いろの光のシャワーのどしゃ降り
高潮する音楽
しずかに退潮しはじめる光と色彩と音楽
ついに
まっくら闇
赤ん坊の泣き声
夜明けの光が地平線をあぶりだす
しだいにくっきりと輪廓をあらわす揺り籠と
その中の赤ん坊
時を告げる牡鶏の声
そして　朝
力づよく泣く赤ん坊
遠くからハシブト烏の大群啼きつらねて
しだいに近づき

（二）

やがて
かまびすしい殺意の大群となって赤ん坊の揺り籠をとりまき　不気味に啼きたてる
白髪白鬚のアイヌの老人　杖をもち　白髪の妻とともに駈けつける
アイヌの老人
「揺り籠があるぞ」
アイヌの老女
「赤ん坊が泣いていますよ」
アイヌの老人
「（杖でハシブト烏の大群を追いはらい）しっしっ　ハシブト烏め　木の実と赤ん坊をとりちがえてはならぬぞ　さあさあ　はやく　この場を去って　森にむかうがいい」
ハシブト烏の大群　追い散らされる
アイヌの老女
「（揺り籠から赤ん坊を抱き上げ）おお　よしよし（やさしくあやす）」
アイヌの老人
「（赤ん坊をのぞきこみ）夜明けの光のように　みずみずしい赤ん坊じゃ」
アイヌの老女
「だれが捨てていったものやら……かわいそうに」
アイヌの老人
「人里遠くはなれてくらすわしら二人がさびしかろうと　天が授けてくれたにちがいない」
アイヌの老女

「おお　よしよし　もう大丈夫じゃ　わたしたちのくらしは貧しいけれど　かわいそうな
捨て子をひきとってやしなうぐらいはなんでもない」
　太陽がまばゆくのぼる
　朝の音楽おこる
アイヌの老人
「太陽がのぼったぞ」
アイヌの老女
「太陽の光にふれて　にっこりほほえんでいますよ」
アイヌの老人
「この子を　ペケレ……光と名づけよう」
アイヌの老女
「ペケレ……いい名ですね　おじいさん」
アイヌの老人
「（先に立ってあゆみつつ）さあ　ペケレを　わしらの小屋に連れかえり　わしらの子ども
として　大切にそだてよう」
　音楽たかまる
　光　しずかに溶暗へとむかう
アイヌの老人
「（歌う）
いのちは　光

（四）

くるしくっても
つらくっても
ぎゅっと
歯をくいしばり
がんばって生きぬけば
いのちは　光」

アイヌの老女
「（歌う）
いのちは　光
かなしくっても
さびしくっても
ぎゅっと
くちびる噛んで
なみだこらえていけば
いのちは　光」

暗転

ナレーター
「日がたち　月がすぎ　またたくまに　五年をへて　ペケレは　その名にふさわしく
光り輝く女の子として　すくすく育ちました
銀いろの髪……銀いろの瞳……ほんとうに　どこでだれの子として　うまれたのでしょう

（五）

でも　心あたたかいアイヌの老夫妻にひろわれたときのペケレには　首にさげられた　緑いろの
大きなペンダント以外には　なにひとつ　身元を証すのに役立ちそうなものはありませんでした」
明るい音楽
明転
ペケレ
「（アイヌの老女の手をふりきって）ほおら　おばあちゃん　風の匂いがするわ　おかあさんの
お乳のような匂いがするわ（風を嗅ぎまわって　駈けずりまわる）」
アイヌの老女
「（笑って）ペケレ　おまえの鼻は　ほんとうに不思議な鼻だよ　とても　人間のものとはおもわれないよ」
ペケレ
「（ふりかえって）だって　空にうかぶ夕焼け雲は焚火の匂いがするし　めざめたばかりの朝の光は
咲きたてのエゾカンゾウの花のように匂うのよ」
アイヌの老女
「ところで　ペケレ　わたしゃ　熟れた薔薇いちごの実が食べたいのだけどねえ　おまえの鼻で
みつけだしておくれでないかい」
ペケレ
「ええ　いいわ　おばあちゃん（地面を嗅ぎまわり　やがて　草むらの片隅でさぐりあて）いたわ　おばあち
ゃん（薔薇いちごの茂みに顔をうずめ）あっ　笑っているわ　赤頭巾をかぶった薔薇いちごの赤ちゃんたち
が　棘だらけの茂みで　にこにこ笑っているわ」
アイヌの老女

（六）

「えっ　薔薇いちごの実が笑っているって？（のぞきこむ）」
ペケレ
「ね　ね　おばあちゃん　まっかな頬っぺで　あかるい声で　笑っているでしょう」
アイヌの老女
「（顔をあげて不思議そうに）おかしいねえ　わたしには　ただの草の実だけどねえ」
ペケレ
「あ　なにか言っているわ　おばあちゃん（薔薇いちごの茂みに耳をおしつけ）
　薔薇いちごの実が　なにか言っているわ」
アイヌの老女
「えっ　薔薇いちごの実が　なにか言っているって？（ふたたび　のぞきこむ）」
ペケレ
「わたしを摘みとって食べる前に　いっしょに歌いましょう……って　言っているわ」
アイヌの老女
「（顔をあげ　いっ層不思議そうに　頭をふって）ペケレ　おまえの耳は　ほんとうに
　不思議な耳だよ　とても　人間のものとはおもわれないよ」
ペケレ
「ねえ　おばあちゃん　薔薇いちごの実と歌をうたってもいい？」
アイヌの老女
「そりゃあ　いいともさ　でも　薔薇いちごの実に口があって　歌をうたうなんて
　とても考えられないけどねえ」

（七）

ペケレ
「だって　おばあちゃん　草の実も人間も　おなじ　命あるものなんでしょう？
いっしょに　歌をうたって　なんの不思議もないはずよ」
音楽
ペケレ（歌う）
「薔薇いちごの実さん
薔薇いちごの実さん
あなたは
いつからこの野に住んでいるの？」
薔薇いちごの声（うたう）
「ペケレさん
ペケレさん
わたしは
ついこの春からですけれど
わたしにやどる命は
あの
お空の太陽とおんなじに
ずっとずっと昔から
一本の光の糸のように
切れめなくつづいているのです」

（八）

ペケレ（歌う）
「すばらしいわ
　薔薇いちごの実さん
　でも
　あなたの
　ずっとずっと昔……というのは
　いつ頃のこと？」
薔薇いちごの声（うたう）
「それはねえ　ペケレさん
　この
　わたしたちの宇宙が
　はじめてできた頃の
　ずっとずっと昔のことなのよ」
ペケレ（歌う）
「じゃあ
　あなたにやどっている命は
　きっと
　その頃のこと
　なにか
　記憶しているにちがいないわ

（九）

薔薇いちごの実さん」
薔薇いちごの実（うたう）
「ええ　そうよ　ペケレさん
わたしたちは
ずっとずっと昔の大昔の
わたしたちの宇宙が
まっかな火の塊となって爆発した
その
はじけるような形を
そのまま記憶して
それを
花の形　実の形にしているのです」
ペケレ（歌う）
「薔薇いちごの実さん
あなたは
ほんとにすごいのね」
薔薇いちごの実（うたう）
「わたしばかりじゃあないのよ
ペケレさん
囲炉裏の火だって……小鳥だって……つめたい小石さえも

（一〇）

ちゃんと
ずっとずっと昔の大昔の
わたしたちの宇宙が
はじめてうまれでたときの
熱と光のはじけとぶ様をおぼえていて
それを
じぶんらしい
さまざまな形にあらわしているのです」
ペケレ（歌う）
「じゃあ
わたしもそうなの？
薔薇いちごの実さん」
薔薇いちごの実（うたう）
「ええ　そうよ　ペケレさん
さあ
みんなで踊りましょうよ　ペケレさん
わたしたち
みんな
宇宙のはじめからの
おなじ命を生きているもの同士なのよ」

（一一）

烈しい閃光
爆発する音楽
踊りでる歌舞団　音楽にのって　はげしく踊る
ペケレも　ともに　踊る

全員
「（音楽にあわせ　踊りつつ　歌う）
ひとりじゃあないよ
わたしたち
ほら
風のおばさんが
肩を叩いて
〝元気をだしな〟って
言ってくれる

ひとりじゃあないよ
ぼくたちは
ほら
雲のおじさんが
背(せな)にさわって
〝しっかりくらせ〟って

言ってくれる

ひとりじゃあないんだ
ぼくもわたしも

花は　友だち
小鳥は　兄弟
人は　みんな　家族です」
　ペケレと歌舞団の歌と踊りの環　光と音楽とともに　しずかに溶暗

アイヌの老人
「（アイヌの老女とともに　スポットライトの中に立ち　杖をつき　白いひげをしごいて）
　ほんとうに不思議な子じゃ　ペケレは……」

アイヌの老女
「ほんとうに　不思議な子ですよ　ペケレは……」

アイヌの老人
「銀いろの髪……銀いろの瞳……」

アイヌの老女
「夜明けの足音をききとる耳……岩の中にしまいこまれた花の香りを嗅ぎわける鼻……」

アイヌの老人
「薔薇いちごの実と話し　エゾシマリスと踊る……」

（一三）

アイヌの老女
「もう　まるで　地球上の人間じゃあ　ありませんよ」
アイヌの老人
「いつくしみ育てたわしらだからいいようなものの――　これがほかの人間たちだったら
　ペケレを　どうおもい　どうあつかうか　ああ　ほんとうに　気がかりじゃ」
　暗転
　風吹きおこる
ナレーター
「その年の秋は　いつになく　つめたい風が吹き荒れました」
　ザアッと降りしきる豪雨
ナレーター
「長雨が降りつづき　木の実　草の実を腐らしました」
　はげしい稲妻のはためき
　吠えたける暴風雨
ナレーター
「時ならぬ稲妻がはためき　暴風雨が　そのまま　雪にかわって　猛吹雪をよびさましました」
　猛吹雪のすさぶスポットライトの中を　ペケレをかばってゆきなやむアイヌの老夫婦
　やがてしずまる吹雪の音
ナレーター
「雪と氷と寒さの　おそろしい冬がやっと終りをつげたのも束の間　春とは名ばかりの　フキノトウの緑も芽

ぶかず　エゾリュウキンカの金いろの花もほころばない　うすら寒い　灰いろの季節がつづきました
人里はなれたアイヌの老夫婦の小屋には　もう炉端にくべる薪も　食膳に出す食べものも
残りすくなでした
野には　狩りの対象となる兎も鹿も姿をみせず　森には　矢で射おとすべきいちわの鳥の影も
なかったのです」
　蒼白いスポットライトの中で身悶えるアイヌの老夫婦とペケレ

アイヌの老人
「（とつぜん　よろめきながら　立ち上がって）さらばじゃ」

アイヌの老女
「（ペケレといっしょに　アイヌの老人にとりすがり）どこにいこうというのですか　おじいさん？」

ペケレ
「いっちゃ　いや　おじいちゃん　食べものがなかったら　みんなで　飢えて死にましょうよ」

アイヌの老人
「（必死の力で杖をふりかざし）わしの言うとおりにするのだ
けっして　わしの後を追ってはならぬ
でなければ　この杖が　おそろしい力を発揮して　おまえたちの脳天をぶち割るぞ」

アイヌの老女
「（床に伏したまま）おじいさん！」

ペケレ
「（アイヌの老女にとりすがり）おじいちゃん！」

（一五）

アイヌの老人　杖をたよりによろめきでる

暗転

風の吹きすさぶ音

ナレーター

「残ったわずかの食べものを　妻とペケレにと　アイヌの老人が姿を消してすぐ
今度は　アイヌの老女が　よろよろと　立ちあがったのでした」

ふたたび蒼白いスポットライトの中で　立ち上がる　アイヌの老女

アイヌの老女

「（ペケレを抱きしめ）さようなら　ペケレ」

ペケレ

「（必死にとりすがり）いっちゃあ　いや　おばあちゃん」

アイヌの老女

「（ペケレをふりはらい　籠をペケレに抱かし）さあ　ペケレ　この籠の中には
よく乾した川魚や　栗の実がはいっている
これを食べて　わたしたちの帰りを待っているのだよ」

ペケレ

「いやよ　おばあちゃん　わたしだけが食べるなんて　とってもできないわ」

アイヌの老女

「（ペケレの頭をなで）わたしたちは　もう　年寄りです
わたしたちは　こんなとき　どこにいったらいいか　ちゃんと知っています

でも　ペケレ　おまえはこれからの命です
一日でも多く　生きながらえるのが　天のさだめです」

ペケレ
「（泣いて）わたしを　ひとりぼっちにしてしまうの？　おばあちゃん」

アイヌの老女
「（ペンダントを出して首にかけてやり）じつは　おまえは　五年前　この近くの草むらに
捨てられていたのです
そのとき　おまえの首にかけられていた　緑いろの大きなペンダントが　これです
よくみれば　エメラルドのような深い色あいの底から　なにか　星座の形に似た
不思議な絵模様が浮かびあがっています
もし　おまえが生きのこってさえいれば　きっとその意味を解きあかして　おまえをわたしたちに
預けねばならなかった　おまえのおとうさんとおかあさんの秘密をおしえてくれるでしょう」

ペケレ
「（泣き伏して）おばあちゃん」

アイヌの老女
「（ペケレの銀いろの髪をなで）さようなら　ペケレ　おまえのお陰で　わたしたちは
とってもしあわせだったよ」

ペケレ
「（立ち去るアイヌの老女を追おうとし　泣いて絶叫し）おばあちゃん！」

暗転

（一七）

音楽

男の合唱団（低く　悲しく　歌う）

「いのちは　光

くるしくっても

つらくっても

ぎゅっと

歯をくいしばり

がんばって生きぬけば

いのちは　光」

女の合唱団（低く　悲しく　歌う）

「いのちは　光

かなしくっても

さびしくっても

ぎゅっと

くちびる噛んで

なみだこらえていけば

いのちは　光」

悲しみの音楽

ナレーター

「ひとりぼっちになったペケレの小屋に　ひどく腹をすかした　一頭のひぐまが

（一八）

よろよろと　入って来たのは　それから数日後のことでした」

明転

ペケレ

「（さして驚かず）まあ　あなた　ひぐまさんね　あなたのこと　アイヌのおじいちゃんから聞いて知っていたわ」

ひぐま

「（悲しく吠える）」

ペケレ

「まあ　お腹がすいているのね（籠から食べものをとりだし）さあ　お食べなさい」

ひぐま

「（いっ層悲しく吠える）」

ペケレ

「えっ　私の食べものじゃないのかって？

いいのよ　ひぐまさん　さあ　お食べなさいな」

ひぐま

「（ペケレの差し出した籠を食い破って　中の食べものをむさぼりつくす）」

ペケレ

「（食べ終ったひぐまの頭をなで）かわいそうに……もうなん日もなん日も食べていなかったのね」

ひぐま

「（ペケレの手をふりはらい　猛け猛けしく吠える）」

ペケレ
「えっ　巣には　飢えた二頭の子熊が　いるのですって？
　かわいそうに……」
ひぐま
「（立ちあがり　口を大きくあけ　ペケレを噛み殺す姿勢で　すさまじく吠える）」
ペケレ
「（ひぐまを手で制し）えっ　わたしを噛み殺したくなったって？
　わたしを噛み殺し　口にくわえて巣にはこび　飢えた子熊に　食べさせてやりたくなったって？
　待ってよ　ひぐまさん（首にかけたペンダントをとりだし）わたしはねえ　ひぐまさん
　捨て子なんです　でも　きっと　いつか　このペンダントの絵模様のなぞを解いて
　わたしをうんだおとうさんとおかあさんの秘密を知りたいとねがっているのです
　だから　それまで待ってよ　ひぐまさん」
ひぐま
「（前脚でペケレを押さえつけ　いっ層たかく吠える）」
ペケレ
「（泣いて）えっ　それまで待っていたら　かわいい子熊が　飢え死にしてしまいますって？
　そう　そうね　その通りだわ
　じゃあ　ひぐまさん　わたしを噛み殺して！
　口にくわえて　巣にはこび　おなかのすいた二頭の子熊に食べさせてあげて！」
ひぐま

「（口を大きくひらき　恐ろしい声で吠え　ペケレを噛み殺そうとする）」

背後で銃声

ひぐま　射たれて死ぬ

猟師

「（まだ硝煙のくすぶる銃をたずさえて　駈けこみ）とうとう　仕止めたぞ　人食い熊め！」

ペケレ

「（ぼう然と）だれ？　あなたは　だれ？」

猟師

「（死んだひぐまの腹に足をあげ）このひぐまを　ずっと追いつづけていた　里の猟師さ

でも　間に合ってよかったぜ　おめえさん　あやうく　食い殺されるところだったじゃあねえか」

ペケレ

「（泣いて）ちがうのよ　猟師のおじさん　わたしは　この　ひぐまさんの　飢えた三頭の

子どもを救うため　じぶんからすすんで食い殺されようとしていたのよ

（ひぐまの骸にとりすがり）ああ　ほんとうに　かわいそうな　ひぐまさん！」

猟師

「えっ？　なんだって？　この餓鬼め　気が狂っていやがる（じろじろとみつめ）人形のようにかわいい顔を

してはいるが　髪は銀いろ　瞳も銀いろ　耳も笹の葉のようにとんがって　すこうし緑いろ……唇は　ルビ

ーいろでつやつやしているが　歯は水晶のように　こまやかに透明で　ふうん　おまけに言うことが　さっ

ぱり人間らしくねえ

（ペケレの胸もとをひっつかみ）やい　餓鬼め　せっかく　人食い熊の牙から救ってやったというのに
ありがとうとも言えねえかたわものめ
おめえは　いったいなにものだ！」

ペケレ
「（泣いて）それが　わたしにも　わからないのよ（猟師にとりすがり）ねえ　猟師のおじさん
お願いですから　わたしが　どんなうまれなのか　おしえて下さいな」

猟師
「（うろたえ）馬鹿ものめ　いまはじめて会ったばかりの俺に　おまえのうまれがわかるはずが
ねえじゃあねえか
（ペケレの顎に手をやって顔をもちあげ）ふん　かねがね　人里はなれて住む変わりものの
アイヌの老夫婦のところに　この世のものともおもえねえ　かわいい女の子がいると
聞いてはいたが……ふん　ふん（立ちあがり）よし　俺に　いい考えがあるぞ」

ペケレ
「（猟師の足にとりすがり）捨て子のわたしの身もとを知る方法があるというの？　猟師のおじさん」

猟師
「（にやりと笑い）えっへっへっへっへ　おめえの名は？」

ペケレ
「ペケレと申します」

猟師
「ペケレ？」

ペケレ
「光という意味です　アイヌのおじいちゃんがつけて下さいました」
猟師
「（ペケレの手をとり）ようし　ペケレ　いいところに連れていってやるぞ」
ペケレ
「（一瞬ひるみ）どこへ？　猟師のおじさん」
猟師
「（あゆみだし）里へおりるんだ　そして大金持ちの牧場主の家にいくんだ」
ペケレ
「えっ　牧場主の家？」
猟師
「えっへっへっへっへ　大都会からやって来た大金持ちの夫婦と若い息子の三人ぐらしでなあ
女の子をほしがっていると　もっぱらのうわさだ」
ペケレ
「じゃあ　わたしを　その家に？」
猟師
「えっへっへっへ　おめえはあったけえ部屋で　たらふく　ケーキやアイスクリームをくっていられる
牧場主一家は　かねがね欲しかった　かわいい女の子と毎日いっしょにくらしていける」
ペケレ
「そしてあなたは？　猟師のおじさん」

猟師
「えっへっへっへっへ　俺は　たんまりとお礼のお金をせしめる……って　まあ　そんなわけだ
（突然　乱暴にペケレの手をひき）さあ　いくぜ　ペケレ！」
ペケレ
「（必死に）待って　猟師のおじさん（ひぐまの骸にとりすがり）かわいそうなひぐまさん一家も
いっしょに連れていってやりましょうよ」
猟師
「（怒って）黙れ！　気ちがい餓鬼め（ペケレの手をつよくひき）二度とそんな馬鹿を言ったら
俺の鉄砲が火をふくぞ」
溶暗
ペケレ
「（泣きながら）ひぐまさーん　ひぐまさーん（エコーして消える）」
暗転
ナレーター
「人さらい同然の猟師が　売りはらうも同然にペケレをひきわたした牧場主一家は
しかし　アイヌの老夫婦におとらない　心やさしい人たちでありました」
華麗な祝宴の音楽
明転
とりどりの色彩の光めぐる
祝いの装いの村人たち　踊りめぐる

角笛　たかく鳴りわたる
人々　静止し　聞き耳をたてる

牧場主
「（中年の妻と　二十歳ほどの息子とそしてペケレの肩に手をまわし）村人のみなさん
本日は　おいそがしいところ　ようこそ　おいで下さいました
（ペケレを前にだし）わたしたちの家族の星座に　あたらしい星が仲間入りいたしました
ペケレです
わたしたち夫婦には　あらたな娘の誕生であり……また　おにいちゃんには
あらたな妹の誕生です（拍手わく）
きょうは　その　お祝いのパーティです
心ゆくまで　飲んで　食べて　歌って　踊って　楽しいひと時をすごしていただければ幸いです」

歓声おこる
華麗な祝宴の音楽
とりどりの色彩の光めぐる
村人　楽しげに踊りめぐる
「（村人　歌って　踊って）
牧場はな　牧場はな
緑の太鼓
馬の蹄で
とんとうちゃ

（二五）

とんと鳴る

野原はな　野原はな
緑のラッパ
雲雀のつばさで
ピイと吹けや
ピイと鳴る」

牧場主夫人
「さあ　ペケレ　そんなところにひっこんでなどいないで　みんなといっしょに踊りましょう」

ペケレ
「ありがとうございます　でも　わたし　こんなに沢山の人をみるの　はじめてなんです」

牧場主夫人
「じゃあ　みなさんを紹介するわ
牛飼いのゴローさん」

牛飼いのゴロー
「（牛の鳴くまねをして）ウンモーオッ　ウンメエーッ　やあ　銀いろの髪のペケレさん
ぼくは　牛飼いにかけちゃあ　だれにもまけないゴローです　ホルスタインの牛だって
ジャージの牛だって　みんな　ぼくの口笛ひとつで　はしりよる」

ペケレ
「わたし　きっと　牛さんと仲よしになれるとおもうわ」

牧場主夫人
「ドサンコ馬係りのヤスケさん」
ドサンコ馬係りのヤスケ
「（ドサンコ馬のいななくまねをして）イッヒヒヒイーン　ウッフゥブルルルル　やあ　銀いろの瞳の
ペケレさん　わたしゃ　ドサンコ馬の親方のヤスケでさあ　やつらの気持ちなら　もう　パッと
こう　やつらの毛並みに　手のひらをあてがっただけで　ぴたり　わかっちまうんでさあ」
ペケレ
「わたし　きっと　ドサンコ馬さんのコトバ　ききとれるようになるとおもうわ」
牧場主夫人
「サイロ係りのサブちゃん」
サイロ係りのサブちゃん
「やあ　緑いろがかった耳のペケレさん　ぼくのサイロは　宇宙探険ロケットのようにでっかいんだぜ」
ペケレ
「それに乗って　どこかの星にいってみたいわ」
牧場主夫人
「山羊係りのオケイさん」
山羊係りのオケイ
「やあ　肌から青い星の光がちりこぼれるような感じのペケレさん」
牧場主夫人
「村でチーズをつくっているタケオ君」

（二七）

チーズづくりのタケオ君
「やあ　空からおりて来た星のようにきれいなペケレさん」
牧場主夫人
「村で　木の彫刻にはげんでいる　芸術家のキョー子さん」
木彫家のキョー子
「やあ　全身から　不思議な力があふれでる感じのペケレさん」
牧場主夫人
「きょう　はるばる遠い南の国から　この牧場と村を取材にこられた　新聞記者の　カルノさん」
新聞記者カルノ
「やあ　地球上のどこにも　あなたと似た感じの人種がいないようにみえるペケレさん」
ペケレ
「えっ　どうして　わかるの？」
新聞記者カルノ
「わたしは　この国のものではありません　地球上のどんなところにでもいって　どんな人とでも会って取材する新聞記者です」
ペケレ
「そういえば　あなたの髪は茶いろで　ちぢれているわ」
牧場主夫人
「（陽気に）わたしたちの国の人は　みんな　黒い髪……黒い瞳（踊りだし）さあ　歌いましょう　踊りましょう

（歌う）
髪の毛のいろがちがってもいい
瞳のいろがちがってもいい
だれとでも
仲よくなれる心さえおなじなら
肌のいろがちがっても
コトバがちがっても
ぜんぜん困らない」

全員
「（音楽にあわせて　歌い　踊る）
いのちは　光
くるしくっても
つらくっても
ぎゅっと
歯をくいしばり
がんばって生きぬけば
いのちは　光

いのちは　光
かなしくっても

（二九）

さびしくっても
ぎゅっと
くちびる噛んで
なみだこらえていけば
いのちは　光」
音楽ひくまり
暗転
空にむすうの星またたく
スポットライトの中に浮かぶペケレと牧場主の息子

牧場主の息子
「（空を仰ぎ）あれが　北斗七星……あれが　北極星……あれが　カシオペア……」

ペケレ
「どうして　星に　名まえがあるの？」

牧場主の息子
「昔から　いろいろな国の人が　いろいろな名でよんでいたのさ　北斗七星だって
七つ星とか　ひしゃく星とかよばれて　その上　一つずつの星にまた名があるのさ」

ペケレ
「その星の人たちは　この地球を　なんてよんでいるのかしら？」

牧場主の息子
「だれも住んでいないから　名づけようもないさ」

ペケレ
「（きっとなって）地球にしか人がいないなんておかしいわ」
牧場主の息子
「ふうん　もし　いるとしても　ぼくらとはちがう生きものだよ」
ペケレ
「髪の毛のいろとか　瞳のいろはちがっても　おなじ心をもった人が　きっと　いるとおもうわ」
牧場主の息子
「いるとしたら　とっくに　地球に攻めこんで　ぼくらを皆殺しにしてるよ」
ペケレ
「どうして？」
牧場主の息子
「きっと　彼らは　すぐれた科学の力をもっているはずだから　ぼくらはひとたまりもないよ」
ペケレ
「（泣いて）どうして？　どうして　そう考えるのよ　おにいちゃん」
牧場主の息子
「だってねえ　ペケレ　ぼくらの住んでいる宇宙は　結局　力のつよいものだけが生きのこるのさ」
ペケレ
「（牧場主の息子の胸を叩き　泣いて）ちがうわ　ちがうわ　ちがうわ」
牧場主の息子
「（ペケレをなだめ）ねえ　ペケレ　悲しいけれど　それは事実なんだ

（三二）

第一　ぼくらが　どうして　海を渡った大都会から　この　さびしい牧場にひっこして来たとおもう？」
ペケレ
「わからないわ」
牧場主の息子
「それはねえ　この地球上でまもなくおころうとしている　おそろしい戦争から　のがれるためなのだ」
ペケレ
「どんな戦争？」
牧場主の息子
「地球上の国々が　二つにわかれて　核兵器という　それはそれは残酷な兵器で殺しあうのさ」
ペケレ
「（顔をおおって泣き）大切な大切な命なのに　どうして殺しあうの？」
牧場主の息子
「ただ　わけもなく　憎みあっているだけなのさ」
ペケレ
「じゃあ　その人たちのところにいって　愛しあいましょうって　言ってあげましょうよ
おにいちゃん　この星のどこかにも　それから　きっと　この広い宇宙の　どこかの星でも
つらいこと　くるしいことを　歯をくいしばって耐え　愛しあって　正しく生きていこうと
がんばっている人たちが　かならず　いるわ」
牧場主の息子
「ペケレ　おまえは　心までが　星の光のように澄んでいて　もう　まるで　べつの星の人のようだよ」

ペケレ
「しあわせをねがう心さえあれば　どこの星のうまれだって　おんなじよ」
牧場主の息子
「でもね　ペケレ　もう　手遅れなんだ」
ペケレ
「そんなことないわ」
牧場主の息子
「ぼくの父はすごい大金持ちでねえ　秘密のルートから　まもなく　世界核戦争がおこり
　この国も　おそろしい放射能爆弾の攻撃にさらされるとの情報を手に入れたのさ」
ペケレ
「ここは　どうして　大丈夫なの？」
牧場主の息子
「（ペケレの耳もとで）ねえ　ペケレ　これは　内緒だけどねえ　じつは　ぼくらの家の下は
　とってもがんじょうな核シェルターになっているのさ」
ペケレ
「核シェルターって？」
牧場主の息子
「地上で核爆弾が炸裂しても　そこにかくれてさえいれば　閃光や爆風や放射能の被害をうけずにすむ
　特別製の地下室なのさ
　ぼくの父は　もう全財産を　三年分の食糧　水　燃料といっしょに　そこにしまいこんだんだから

ペケレ　ぼくらは　多分　しあわせにくらしていけるとおもうよ」
ペケレ
「牧場ではたらいている人も　村の人も　みんな　はいれるの？」
牧場主の息子
「残念ながら　父と母と僕とペケレの四人だけさ」
ペケレ
「（泣いて）じゃあ　わたしたち　牛飼いのゴローさんとか　山羊係りのオケイさんとか
チーズづくりのタケオ君を　見殺しにするの？」
牧場主の息子
「（突然　手でペケレの口をおさえ）しーっ　だれか　木のかげで　ぼくらの話を
盗みぎきしているぞ（肩の猟銃を外してかまえ）だれだ？」
明転
新聞記者カルノ
「（木のかげから姿をあらわし）やあ　今晩は　いい星空ですなあ」
牧場主の息子
「（銃をつきつけ）そこを動くな　カルノ」
カルノ
「わたしが　何をしたというんで？」
牧場主の息子
「僕たちの話を盗みぎきしたな」

カルノ
「木のかげで　星をみるのは　こっちの自由ですよ」
牧場主の息子
「この牧場の秘密を知ったものは射殺しろとの父の命令なんだ」
カルノ
「射殺されるのを承知で　はい　秘密を盗みぎきしましたって白状する馬鹿はいませんや」
牧場主の息子
「この牧場に来たときから　僕は　おまえを怪しい奴とにらんでいたのだ　さあ　カルノ
　どこの新聞社の記者か言ってみろ！」
カルノ
「口からでまかせを言ったって　国際電話で照会すれば　すぐ　嘘がばれてしまいまさあね」
牧場主の息子
「案の定のいかさま師め（銃を目の高さにかまえて照準し）やっぱり　この牧場の様子を
　さぐりにきた　国際ギャング団の一味だな　覚悟しろ」
カルノ
「（突然　ペケレをひきよせ　首に腕を巻き　背後にまわって）射つなら射ってみろ
　ペケレが　先に　おだぶつだぞ（そのまま後ずさる）」
ペケレ
「はなして下さいな　カルノさん」
カルノ

「おまえを手放すのは　こちとらの命を手放すのとおんなじ　そうは問屋がおろさねえ」
牧場主の息子
「（銃の照準をはずし）卑怯者め　いよいよ　ギャングの本性をあらわしたな」
カルノ
「（ますます後ずさり）ふん　お若けえの　この始末は　きっと　つけさせてもらうぜえ
（ペケレをぱっと突きはなし　逃げ去る）」
牧場主の息子
「（ペケレを抱きおこし）大丈夫？　ペケレ」
暗転
ナレーター
「この国の金持ちの家を狙って荒らしまわる国際ギャング団の首領カルノの捨てぜりふが
実行されるのに　数日とはかかりませんでした」
激しい銃声　とびかう火花
カルノの声
「やい　手下ども　自動小銃とダイナマイトにものをいわせて　牧場主たちを皆殺しにし
地下の核シェルターにかくした財宝を根こそぎ奪ってしまえ」
はげしい銃声　とびかう火花
ダイナマイトの爆音
牧場主の声
「うん　やられた！」

ふたたび　はげしい銃声　とびかう火花

牧場主夫人の声

「あああああ」

ふたたび　はげしい銃声　とびかう火花

牧場主の息子の声

「畜生め！　やられた」

銃声しずまる

明転

国際ギャング団の男たち　手に手に　自動小銃　ダイナマイトをたずさえ

奪いとった財宝をたかくかかげて　勝どきをあげる

カルノ

「ざまあみろ　核爆弾でもこわせねえ　ごじまんの核シェルターも　この　カルノ様の手にかかりゃあ

いちころだ　さあ　ものども　この家にガソリンで火を放ち　トラックで引き揚げだあ」

少年ギャング

「（ペケレを腕に横抱きにしてあらわれ）カルノ首領　女の子が　テーブルのかげで気絶してましたぜ」

カルノ

「ペケレの奴だ」

ギャング団の一人

「（自動小銃をとりあげ）この家のものは皆殺しだい」

カルノ

「待て　こいつがいなかったら　逆に　俺が　あの若僧の銃で殺されていたのはまちげえねえ
よし　命だけは助けてやれえ　今回の仕事の戦利品の一部として　トラックに積んじまえ」
少年ギャング
「で　その後　どうするので？」
カルノ
「（鞭で少年をうち）黙れ　余計なことをいうと　唐揚げにして食っちまうぞ　いいか
逃げられねえように　おめえが　責任もって　みはってろ」
少年ギャング
「へえ　首領」
カルノ
「さあ　ものども　火をはなて」
赤い光　地平をめらめらと燃やし　たちまち　空間いっぱいに　燃えひろがる
音楽にあわせて　歌い踊るギャング団
「俺たちゃ
国際ギャング団
アジア　アメリカ　ヨーロッパ
世界全体またにかけ
盗んで　殺して　燃やして　逃げる
俺たちゃ
国際ギャング団

（三八）

世界核戦争おきぬまに
たっぷり
盗んで　殺して　奪って　かせぐ
俺たちゃ
国際ギャング団」
暗転
ナレーター
「あまりのおそろしい出来事に　気を失ったままのペケレを乗せたトラックは
砂煙をたてて牧場を後にし　追いすがる警察の車をふり切って　人目をしのぶ海岸に
かくしとめておいた快速船へとつっぱしりました
そして　二日後には　もう　海をへだてた　この国のいちばん大きな都会にある
国際ギャング団の隠れ家は　成功を祝うカルノ一味の酒盛りで大にぎわいだったのです」
明転
盃をあげ　ギターを奏で　踊り狂うギャングたちのシルエット
狂騒の音楽
狂気の光と色　急速に交錯する
カルノの罵声
「さあ　ものども　飲めや歌えや」
手下たち
「おう」

カルノ
「やい　小僧　ペケレを連れて外にでていろ
逃がしたら承知しねえぞ」
すべて　エコーとなって急速にすぼまり
やがて　暗転
沈黙
しずかに降りしきるシンセサイザーの音楽
天空にまたたく星の光芒
ひと筋の流れ星
少年ギャング
「（ペケレとともに　スポットライトの中で）ペケレっていうの？」
ペケレ
「ええ　光という意味なのよ」
少年ギャング
「いい名だねえ」
ペケレ
「あなたの名は？」
少年ギャング
「いまは　みんな　小僧とよんでいる」
ペケレ

「いまは？」
少年ギャング
「そう　でも　いつか　きっと　みんな　ぼくのことを　カルノ二世（ジュニア）とよぶようになるとおもう」
ペケレ
「じゃあ　あなたは？」
カルノジュニア
「そう　カルノは　ぼくの　実の父親なんだ」
ペケレ
「で　おかあさんは？」
カルノジュニア
「ぼくをうんで　すぐ　死んじゃったんだ」
ペケレ
「難産だったのね」
カルノジュニア
「うん（すすり泣いて）ぼくがうまれさえしなければ　かあさんは　死なずにすんだんだ」
ペケレ
「（カルノジュニアの肩をなで）でも　おとうさんがいるわ」
カルノジュニア
「（きっと顔をあげ）でも　ぼく　決心したんだ」
ペケレ

（四一）

「えっ　なにを？」
カルノジュニア
「（ペケレの手をとり　あたりをみまわした後　声をひくめ）ペケレ　いっしょに逃げよう
みんなは　明日　君を　秘密の船にのせて　遠い南の国に売りはらおうとしている
さあ　いますぐ　ぼくといっしょに　逃げよう」
ペケレ
「（驚いて）でも　カルノジュニア　あなたのおとうさんが……」
カルノジュニア
「ぼく　ギャングなんか　もういいんだ」
ペケレ
「つかまったら　ひどい目にあうのは　あなたよ」
カルノジュニア
「覚悟の上さ（ペケレの手をひいて　はしりだし）さあ　逃げようペケレ
一刻もはやく　カルノ一味から遠ざかるんだ」
二人駈け去り
暗転
急迫の音楽
急旋回するスポット
その中を　手をとりあって逃走するカルノジュニアとペケレ
ふたたび暗転

国際ギャング団の男たちの声
「小僧め！　どこにずらかりやがった？」
「ペケレに　たぶらかされたな」
「畜生！」
「みつけたら　なぶり殺しだあ」
急迫する音楽
旋回するスポットライトの中を逃げまどうカルノジュニアとペケレ

ペケレ
「（息もたえだえに）もう走れないわ　カルノジュニア」
カルノジュニア
「がんばるんだ　ペケレ」
ペケレ
「（立ちどまり）やっぱり　悪いわ　カルノジュニア　わたしのためにあなたまで
ひどいめにあうのは　耐えられないわ」
カルノジュニア
「（ペケレの手をつよくひき）もう遅いよ　ペケレ　奴らは　ぼくらの逃走に気づいて
探しはじめている　こんどつかまったら　君だって　遠い南の国に売りはらわれるより
もっとひどい仕打ちをうけるにきまっている
（ペケレの目を凝視し）それにねえ　ペケレ　ぼくは　ぼくじしんのためにも
あすこを逃げだしたいんだ」

ペケレ
「えっ　あなたじしんのため？」
カルノジュニア
「そう　いつか　あのギャング団から足をあらおうとしていた矢先
君の　星のような目にであって　決心がついたんだ」
ペケレ
「（立ちあがって）じゃあ　わたしたち　おなじ運命なのね（カルノジュニアの手をひき）
逃げましょう　カルノジュニア　そして　正しく生きる道を探しましょう」
暗転
ナレーター
「大都会のビルとビルの谷間をぬけ　くらい地下道をくぐり　自動車のゆきかう交叉点をつっきって
ペケレとカルノジュニアがたどりついたのは　木立にかこまれた　かなり広い　一軒の建物でした」
明転
カルノジュニア
「孤児院と書いてあるぞ」
ペケレ
「えっ　孤児院って？」
カルノジュニア
「親のないみなしごの入るところさ」
ペケレ

「じゃあ　わたしのためにある施設ね」
カルノジュニア
「ねえ　ペケレ　ぼくら　ここで別れよう」
ペケレ
「（驚いて）どうしてなの　カルノジュニア」
カルノジュニア
「この孤児院で　君は　あついスープとあったかい毛布と　読み書きの勉強のチャンスに
　めぐりあうことができると思うよ」
ペケレ
「勉強？」
カルノジュニア
「君は　字を書いたり読んだりはできないのだろう？」
ペケレ
「でも　磁石がなくったって　東西南北の方角がわかるし　気象レーダーがなくっても
　とおくから近づいてくる嵐の気配を　察することができるわ」
カルノジュニア
「それはすばらしいね　ペケレ　でも　やっぱり　ぼくらは　文字で　手紙を書いたり
　詩を書いたりもできなくっちゃあ……」
ペケレ
「わかったわ　勉強すれば　きっと　わたしのペンダントのなぞもとけるのね」

（四五）

カルノジュニア
「ペンダント？」
ペケレ
「ええ　北の奥地で　アイヌのおじいちゃん　おばあちゃんにひろわれたとき
　わたしの首にかけられていたものなの」
カルノジュニア
「ぼくにみせてくれる？」
ペケレ
「ええ　いいわ（首からペンダントをはずし）これがそうよ」
カルノジュニア
「（ペンダントをうけとり　いじりまわし）ふうん　エメラルドいろの底から
　星座のような形がうかびあがってくる　不思議だなあ（空にかざし）おや　ペンダントをすかして
　空の星がみえるような気がするけれど　どうもはっきりしないなあ」
ペケレ
「えっ　ほんと？（カルノジュニアからペンダントをうけとり空の星にかざしてみる）
　ぼうとかすんではいるけれど　まちがいなく星の光だわ」
カルノジュニア
「（ペケレの手をにぎり）じゃあ　ペケレ　元気でね」
ペケレ
「あなたはどこにいくの？……カルノジュニア？」

カルノジュニア
「心配御無用さ　ペケレ　貧しくっても　正しく働いて生きるから　大丈夫だよ」
ペケレ
「（カルノジュニアの手を握りかえし）お手紙ちょうだいね　カルノジュニア
わたし　一生けん命勉強して　きっときっと　読み書きできるようになりますから――」
カルノジュニア
「がんばるんだよ　ペケレ」
カルノジュニア　走り去る
ペケレ　茫然とみおくる
溶暗
音楽
ペケレ
「（スポットライトの中ですすり泣きながら歌う）
いのちは　光
くるしくっても
つらくっても
ぎゅっと
歯をくいしばり
がんばって生きぬけば
いのちは　光」

暗転

ナレーター

「不意の闖入者に驚いたのは孤児院の院長さんたちでしたが　ペケレの身の上を聞いて
ともあれ　しばらくの間は　孤児院に預かってみようということになったのでした」

にわかに　騒がしい音楽

明転

孤児院の子どもたち　歌いながら　踊りながら　走りでる

「（からかいの調子で）

銀の糸くずでできた銀の髪

ペケレの頭は

ギンギンボソボソ

月夜の鳥の巣の頭

銀のまなざしたばねた銀の目よ

ペケレの瞳は

ギンギンスカスカ

月夜の海の酎のくらげ」

ペケレ

「（孤児院の子らの円陣の中で　泣きながら右往左往し）なぜなの？　どうしてなの？」

孤児院の男の子1

（四八）

「ペケレ　おまえは　密航者だろう」
他の子ら
「（はやしたて）わーい　密航者　密航者」
ペケレ
「（泣きながら）密航者って　なに？」
孤児院の女の子1
「ペケレ　おまえは　なんにもわからないんだねえ」
他の子ら
「（はやしたて）わーい　なんにもわからん　なんにもわからん」
ペケレ
「（泣いて）この孤児院じゃあ　なんでも親切におしえてくれるって　カルノジュニアが言っていたわ」
孤児院の男の子2
「カルノジュニア？　ははあ　そいつと共謀して　月から地球に密航してきたんだな？」
他の子ら
「（はやしたて）わーい　月から地球に密航だ　月から地球に密航だ」
ペケレ
「（泣いて）ちがうわ　ちがうわ」
孤児院の女の子2
「その上　ペケレ　おまえはきっとどこか得体の知れないところから
この孤児院にもぐりこんだのにちがいないわ」

他の子ら
「（はやしたて）わーい、もぐりだあ　もぐりだあ」
ペケレ
「（はげしく泣き）ちがうわ　ちがうわ」
　孤児院の子ら　ペケレをとりまいて　歌いながら　踊りながら　ぐるぐる旋回する
「（からかいの調子で）
緑の耳の　ペケレさん
緑の星の　緑の音楽お好きの　ペケレさん
頭の中も
緑の音符でいっぱいの　ペケレさん

ブルーの肌の　ペケレさん
ブルーの星の　ブルーのシャワーお好きの　ペケレさん
体の中も
ブルーのあぶくでいっぱいの　ペケレさん」
ペケレ
「（半狂乱で泣き）ちがうわ　ちがうわ　ちがうわ（エコーで　しだいに消失）」
　溶暗
　沈黙
ナレーター

「孤児院の裏手は　うっそうと生いしげった森でした
悲しみのあまり　孤児院の部屋をぬけだしたペケレは　森のはずれの草むらで泣きくずれました」
ペケレ（スポットライトの中で）
「（泣いて）わたしは　だれ？　いったい　だれなの？　ああ　おとうさん　おかあさん　どこにいるの？」
　遠くから音楽
　かすかに　やがて　だんだん　たかまる　カルノジュニアの歌声
「いのちは　光
かなしくっても
さびしくっても
ぎゅっと
くちびる噛んで
なみだこらえていけば
いのちは　光」
ペケレ
「（立ちあがり）カルノジュニアだわ（声の方に駈けより　姿をあらわしたカルノジュニアに抱きつく）
カルノジュニア！」
カルノジュニア
「（スポットライトの中で）ペケレ　どうして　泣いていたの？」
ペケレ
「わたしが　悪いんだわ」

（五一）

カルノジュニア
「孤児院の子らにいじめられたんじゃあないの？」
ペケレ
「わたしのせいなんだわ」
カルノジュニア
「で　勉強の方は？」
ペケレ
「（急にいきいきと）ええ　とっても面白いわ　もう　あなたにお手紙書けれてよ」
カルノジュニア
「ほかには？」
ペケレ
「（目を輝かし）くれよんでひまわりの花を描いたり　算数で　ゼロにどんな数字をかけてもゼロになるとおそわったり（突然カルノジュニアの手をとり）それからねえ　カルノジュニア　すごいことがあるのよ」
カルノジュニア
「どんなこと？」
ペケレ
「あのねえ　いろいろと　宇宙のことをおそわったのよ
わたしたちの住んでいる銀河系だけでも　数千億もの恒星がちらばっていて　その一つ一つのまわりを　いくつかの惑星がまわっていて　そのうちのいくらかの星には　わたしたちとおなじような生命の存在する可能性が非常につよいのですって」

（五二）

カルノジュニア
「そう　地球もまた　生命の存在しうる　銀河系の中の惑星のひとつにすぎないって
　えらい学者が言っているよ」
ペケレ
「そして　その生命たちは　みんな　銀河系の　いや　宇宙の　おなじ血をひく家族なのよ」
カルノジュニア
「（空をみあげ）ほんとうに不思議だなあ　あんなに遠くの星が　ぼくらの地球とおんなじ家族だなんて――」
ペケレ
「（にわかに打ち沈み）でも　地球に住んでいる六十億の人々がおなじ家族としてくらしていくのは
　大変なんだわ」
カルノジュニア
「この小さな孤児院の　わずか数十人の子どもたちのあいだでも大変なんだからねえ」
ペケレ
「（うつむいて）ほんとにそうだわ（カルノジュニアに向きなおり）ねっ　カルノジュニア
　わたしはだれ？　いったいだれなの？」
カルノジュニア
「（たじろぎ）ぼくらとおなじ　宇宙の生命さ」
ペケレ
「あなたも　みんなとおなじに　わたしが　この地球の人間じゃあないのでは……と
　疑っているのね（泣く）」

（五三）

カルノジュニア
「（ペケレの肩を抱き）どこの星のうまれだって　いいじゃあないか」
ペケレ
「（パッと顔をあげ　カルノジュニアの胸もとをつかみ）ほんとうにそうおもう？」
カルノジュニア
「ほんとうだとも」
ペケレ
「（踊りだし）ありがとう　カルノジュニア
わたし　それを聞いて　とってもうれしいわ」
カルノジュニア
「それで　ペケレ　ペンダントのなぞはとけたの？」
ペケレ
「（うれしそうに）すこしずつね（ペンダントをとりだし）きっと　このペンダント　天球儀なのよ」
カルノジュニア
「どうして？」
ペケレ
「ひらべったい形はしていても　こうして　すかしてみると　球のように　ふわりと　ふくらんでみえるわ」
カルノジュニア
「ほんとう？　（ペケレからペンダントをうけとり　すかしてみて）そうだ　そして
鎖のついているところが　天の北極と考えれば　この小さなエメラルドの天体には

（五四）

むすうの星がキラキラと光り輝いていることになる」

ペケレ

「いいことを思いついたわ（カルノジュニアからペンダントをうけとり　鎖で吊るしたまま
北極星の方にさしのべ）ね　カルノジュニア　このペンダントの北極を
空の北極星と重ねあわすと（ペンダントをすかしみ）そうら　やっぱり」

シンセサイザーの音楽　はじめは低く　神秘的におこる

宇宙のさまざまな光芒運動が　多彩な色彩とともに旋回しはじめる

カルノジュニア

「どうしたの？　ペケレ」

ペケレ

「いままでは　すかしてみても　ぼんやりと　水にうつった蛍の火のようにじんでいた星が
宝石のように　はっきりとみえてきたわ
（狂喜し）あ　カルノジュニア　じっとみていると　どんどん　ペンダントがふくらんで
大きくなり　わたしをのみこんでいくわ　ね　カルノジュニア　来て！　ここに来て
いっしょにペンダントをすかしてみて！」

カルノジュニア

「（ペケレとともにすかしみ）あっ　ほんとうだ　ぼくも　エメラルドいろに深く澄んだ
ペンダントの中の宇宙に吸いこまれていく！」

音楽　たかまる

色とりどりの光芒　渦巻いたり　はじけたり　のびたり　ちぢんだりしながら旋回する

（五五）

ペケレ
「あ　みえてきたわ　ひとつの星座が　はっきりと　帆をはった船の形にみえてきたわ」
カルノジュニア
「ヨット座だ　十三の星が水平線をつっきってすすむヨットの形につらなっている」
　ヨット座が天空に光り輝く
　神秘的なシンセサイザーの音楽にあわせて低くおこる声
「(女の声で) このペンダントをもつ娘よ　わたしは　おまえの生みの母親です」
ペケレ
「(絶叫し) おかあさん！」
父の声
「このペンダントから　わたしたちの声をきく娘よ　わたしは　おまえの実の父親だ」
ペケレ
「(絶叫し) ああ　おとうさん！」
母の声
「おまえは　ヨット座の小さな惑星オブのうまれです
　地球と瓜ふたつのすばらしい星です」
ペケレ
「オブ！」
父の声
「よく聞くがいい　わが娘　しかし　わたしたちの星オブは　もう　寿命がつきかけている」

ペケレ
「そんな！」
母の声
「わたしたちの星に　熱と光をめぐみつづけた　地球でいえば太陽にあたる恒星シユールが
　燃えつきて　巨大な赤色巨星にかわりはじめたのです」
ペケレ
「ああ！」
父の声
「これとおなじ運命が　やがて　地球と太陽の間柄にも　必ず　やってくる」
ペケレ
「やめて！」
母の声
「恒星シユールの温度が上がりはじめ　すでに　わたしたちの惑星オブでは　氷河と氷山が溶けだし
　海の水がものすごくふえて　多くの都市が　海底に沈みました」
ペケレ
「ひどいわ！」
父の声
「気候が乱れ　オブのすべてが狂いはじめ　わたしたちは　ふるさとの星オブを去らねば
　ならなくなったのだ（声が震える）」
ペケレ

（五七）

「ああ（泣く）」

母の声

「でも　どこに移り住めましょう　この宇宙のどこでも　住みやすい星には
すでに　むすうの生命が住みついています（声が震える）」

ペケレ

「でも！」

父の声

「たしかに　わたしたちの科学は　地球の人々よりずっとすすんでいる　しかし
わたしたちは　けっしてその力を利用して　他の星の人々を攻撃したりはしない」

ペケレ

「なぜ？」

母の声

「戦争などという　野蛮な習慣をすてたからこそ　わたしたちは　こうして　地球を訪れるまでの
高い科学の力をもちえたのです」

ペケレ

「しかし！」

父の声

「この宇宙で　より長く栄える星の人々は　みんな　高い科学の力　技術の力と
それ以上のがまんづよく賢い心の力をもっているのだ」

ペケレ

「だけど」
母の声
「わたしたちの星の人々は　知りうるかぎりの　生命の存在する他の星を求めて
　わかれわかれに　出発したのです」
ペケレ
「かわいそうに！」
父の声
「わたしたちのグループは　地球をめざした
　だが（声がつまりだす）核兵器で武装し　国と国の争いの絶えない地球の人々に
　どうやって　わたしたちの移住をゆるしてもらえるだろうか」
ペケレ
「おとうさん！」
母の声
「（泣いて）わたしたちには　地球上の人々みんなのもつ　国籍も　戸籍も　市民権もないのです」
ペケレ
「（泣いて）おかあさん！」
父の声
「でも　生まれたての子どもなら　なんとかなるだろう（泣く）」
ペケレ
「あああああ」

母の声
「(泣いて) 地球上の人々の中でも　心やさしく　いつくしみぶかい人なら　赤ん坊のおまえを
地球人とおもって　育ててくれるだろう」
ペケレ
「(絶叫し) それで　わたしを捨てたのね」
父の声
「(泣いて) ゆるしておくれ　わたしの娘」
ペケレ
「(怒って) わたしをひろったアイヌのおじいちゃんとおばあちゃんが　わたしに
ペケレ……光という意味の名前をつけてくれたわ」
母の声
「(泣いて) ゆるしておくれ　ペケレ　でも　ほんとうに　仕方なかったのよ」
ペケレ
「(泣いて) ごめんなさい　おかあさん」
父の声
「(泣いて) ゆるしておくれ　ペケレ　わたしたちが　どんなに苦しんでいるか
悲しんでいるか　わかっておくれ」
ペケレ
「(泣いて) わたしたち　みんな悲しいのね　おとうさん」
母の声

「じゃあ　ペケレ　元気でね」
ペケレ
「いや　いや　いや　いますぐここにおりてきて　おかあさん」
母の声
「(泣いて) わたしたちは　おまえを　アイヌの老人夫婦の家の前において
すぐ　別な星にむけて旅だったのです」
ペケレ
「うそ　うそ　うそ　だって　いま　こうして　お話ししているじゃあないの」
父の声
「じつは　この声は　わたしたちが　おまえの為に　地球のはるか上空にのこしていく
超高性能の小さなコンピューター衛星からのものなのだよ　ペケレ」
ペケレ
「(泣いて) うそ　うそ　うそ　だって　こうして　わたしとお話ししているじゃあないの」
母の声
「このコンピューター衛星は　わたしやおとうさんの頭脳とほとんどおなじに会話できるのです
(泣いて) でも　おまえが　ペンダントの秘密をといて　このコンピューター衛星に記憶させた
わたしたちのおまえへのおもいを知る頃には　わたしたちは　想像もできないほど遠くの
宇宙空間をさまよっていることでしょう」
ペケレ
「(泣いて) 一度でいいから姿をあらわして　おかあさん」

父の声
「さようなら　ペケレ　地球の人として　しあわせにくらしておくれ（泣く）さようなら　わたしの娘」
母の声
「いつまでも　おまえのことは忘れないよ　ペケレ（泣いて）さようなら　わたしの子ども」
ペケレ
「待って　おとうさん　おかあさん　待って」
　音楽　急速に消失
　色とりどりの光芒　ヨット座の星々消失
スポットライトの中のペケレ
「あああああ（大声で泣く）」
カルノジュニア
「（ペケレを胸に抱き）かわいそうなペケレ（手で背をさすり　しずかに歌う）
　いのちは　光
　くるしくっても
　つらくっても
　ぎゅっと
　歯をくいしばり
　がんばって生きぬけば
　いのちは　光」
　溶暗

ナレーター
「でも　ペケレは賢い子でした　おとうさん　おかあさんの言葉どおりに　地球の人として
明るく　正しく生きぬこうと　決心したのです」
　にわかに騒がしい音楽
　明転
　孤児院の子ら　歌って　踊って　走りでる
「（からかいの調子で　ペケレを円陣の中にとりこみ）
銀の糸くずでできた銀の髪
ペケレの頭は
ギンギンボソボソ
月夜の鳥の巣の頭

銀のまなざしたばねた銀の目よ
ペケレの瞳は
ギンギンスカスカ
月夜の海の酎のくらげ」
ペケレ
「（陽気に）わあ　とってもおもしろい歌だわ
でもねえ　金いろの髪で　金いろの瞳の人も　この地球にはいるのよ」
孤児院の男の子

「（興味をしめし）ほんとうかい　ペケレ？」
ペケレ
「ほんとうよ　この孤児院の図書館の百科事典に　ちゃんと　カラーの写真がでているわ」
孤児院の女の子1
「ふうん　ペケレって勉強家なんだなあ
こんど　わたしも　みてみるわ」
ペケレ
「その方がいいわ　なんでもねえ　アメリカやヨーロッパの人に多いんですって」
孤児院の男の子2
「ふーんだ　知ったかぶりして
（からかいの調子で歌いだし　踊りだし　やがて孤児院の子ら　歌い　踊る）
緑の耳の　ペケレさん
緑の星の　緑の音楽お好きの　ペケレさん
頭の中も
緑の音符でいっぱいの　ペケレさん
ブルーの肌の　ペケレさん
ブルーの星の　ブルーのシャワーお好きの　ペケレさん
体の中も
ブルーのあぶくでいっぱいの　ペケレさん」
ペケレ

「（にこにこしていっしょに歌って踊り）楽しい歌だわ
　でもねえ　うまれたとき　お尻が緑いろがかった青いいろにそまっている人もずい分多いのよ」
孤児院の女の子2
「えっ　ペケレ　それ　ほんと？」
ペケレ
「このあいだ　この孤児院のひげの院長さんがおっしゃっていたわ
　なんでもねえ　モンゴリヤンっていうか　全身がすこうし黄いろがかった人々のあいだに多いので
　蒙古斑というんですって」
孤児院の男の子3
「じゃあ　人間って　みんな　いろがついているのかい？」
ペケレ
「テレビでみたらねえ　この地球上の六十億の人々は　だいたい肌のいろが黄いろっぽい感じの
　モンゴロイド　白っぽい感じのユーロポイド　黒い感じのニグロイドの三つにわかれるんですって」
孤児院の女の子3
「じゃあ　わたし　モンゴロイドのお玉ちゃんだわ」
　孤児院の子どもたち　どっと笑う
孤児院の男の子4
「じゃあ　ペケレ　ひょっとして　おまえ　ユーロポイドかもね」
ペケレ
「ユーロポイドのペケレちゃんかもね」

（六五）

みんな　どっと笑う

孤児院の女の子4
「じゃあ　ペケレ　髪の毛もおなじこと？」

ペケレ
「そうよ　地球上には　金いろ　銀いろ　茶いろ　黒　赤　いろんな髪の毛の人がいるわ」

孤児院の男の子5
「じゃあ　ペケレ　目のいろもかい？」

ペケレ
「そうよ　地球上には　金いろ　銀いろ　茶いろ　黒　青　灰いろ　緑いろ　いろんな瞳の人がいるわ」

孤児院の女の子5
「（ペケレの肩を抱き）なあんだ　ペケレ　あなたも　ただの地球人だったのかあ」

みんな　どっと笑う

ペケレ
「そうよ　こうして　みんなと　仲よく　地球の上でくらしていれば　みんな　正真正銘の地球人よ」

音楽おこる

ペケレ
「（虚空を舞いとぶ蝶を追って）あっ　蝶さんだわ

（音楽にあわせて歌い）

蝶さん　蝶さん

あなたは

いつからこの庭に住んでいるの？」
蝶の声（うたう）
「ペケレさん　ペケレさん
わたしは
この春　蛹からかえったばかりですけれど
わたしの命は
宇宙が
はじめて光ってはじけたその日から
きょうまでずっと
光の糸のようにつづいているのです」
ペケレ（歌う）
「じゃあ
蝶さん
あなたとわたしは
宇宙の
たったひとつの命の泉から流れでた
むすうのせせらぎの中のふたつなのね」
蝶の声（うたう）
「ペケレさん　ペケレさん
あなたばかりじゃあ　ありません

（六七）

この孤児院の
ケンちゃんもヨッちゃんもシロちゃんも
いやいや
庭のプラタナスの木も　タンポポも
地を這う蟻も
さえずる雀も
みんな
宇宙の
たったひとつの命の泉から流れでた
むすうのせせらぎの中の
ひとつずつじゃあありませんか」
ペケレ
「（孤児院の子らのひとりずつの手をとって　踊りの中にひきこみ）
ケンちゃん　歌いましょ」
ケンちゃん
「ペケレちゃん　歌いましょ」
ペケレ
「ヨッちゃん　歌いましょ」
ヨッちゃん
「ペケレちゃん　歌いましょ」

（六八）

ペケレ
「シロちゃん　歌いましょ」
シロちゃん
「ペケレちゃん　歌いましょ」
ペケレ
「（プラタナスの木をふり仰ぎ）
　プラタナスの木さん　歌いましょ」
プラタナスの木の声
「ペケレさん　ペケレさん　歌いましょ」
ペケレ
「（地面の蟻を目で追い）
　蟻さん　蟻さん　歌いましょ」
蟻の声
「ペケレさん　ペケレさん　歌いましょ」
ペケレ
「（空飛ぶ雀を手で追い）
　雀さん　雀さん　歌いましょ」
雀の声
「ペケレさん　ペケレさん　歌いましょ」
全員

（六九）

「みんなで　いっしょに　歌いましょ」
　烈しい閃光
　爆発する音楽
　踊りでる歌舞団　音楽に乗って　はげしく踊る
全員
「（音楽にあわせ　歌い　踊る）
　ひとりじゃあないよ
　わたしたち
　ほら
　風のおばさんが
　肩を叩いて
　〃元気をだしな〃って
　言ってくれる

　ひとりじゃあないよ
　ぼくたちは
　ほら
　雲のおじさんが
　背にさわって
　〃しっかりくらせ〃って

（七〇）

言ってくれる

ひとりじゃあないんだ
ぼくもわたしも

花は　友だち
小鳥は　兄弟
人は　みんな　家族です」
　全員の歌と踊りの環　光と音楽とともに　しずかに溶暗

ナレーター
「ところが　この様子を　たまたま孤児院の取材にきていた新聞記者が発見したから
さあ　たまりません　大都会は　蜂の巣をつっついたような大騒ぎになってしまいました」

号外売り
「（スポットライトの中を　鈴を鳴らしてはしり）号外だあ　号外だあ　孤児院に
蝶々と話のできる不思議な女の子があらわれたあ」

別の号外売り
「（反対の方角から　スポットライトの中を鈴を鳴らしてはしり）号外　号外
孤児院のペケレという少女が　プラタナスの木といっしょに歌をうたったあ」
　暗転

テレビニュースのキャスターの声

（七一）

「（ホリゾントに孤児院とペケレの顔を　ブラウン管さながらにうつしだし）臨時ニュースを申し上げます
きょう午後三時二十八分　孤児院の庭で　孤児たちが　蝶や木や蟻や雀といっしょに歌いながら踊っている
場面が発見されましたが　すべては　少女ペケレの不思議な能力のせいと判明致しました」
新聞の読者
「（スポットライトの中で　ゆうゆうと新聞をひろげ）孤児院に奇跡の少女あらわる……かあ」
暗転
すさまじいトラックの爆音
急停車のブレーキ音
どどどどっと　雪崩をうっておりる靴音
はげしく明滅する赤の光の中を　銃を手に襲いかかる国際ギャング団の影
カルノ
「（怒声で）畜生奴　ペケレの奴　とうとうみつけたぞ
さあ　ものども　さらっちまえ」
手下ども
「へーい」
靴音も荒々しく突進する手下ども
やがて
ペケレ
「（悲鳴）キャーッ　助けてえ」
暗転

ナレーター
「探し求めていたペケレをふたたび手中にした国際ギャング団の首領カルノは　しかし　ペケレが　南の国に売りはらうよりは　もっと　ぼろい金もうけのえさになるとわかって　ひとり　ほくそえんだのでした」
カルノ
「（スポットライトの中で）やい　ペケレ　命が惜しかったら　俺のいうとおりにするんだ」
ペケレ
「（おびえ切って）わたしをどうしようっていうの？」
カルノ
「（ほくそえみ）えっへっへっへ　きれいなおべべを着て　おしろい　口紅　アイシャドウ　べっとり顔にぬったくって　世界中継テレビに出演するんじゃ」
ペケレ
「そして　なにをするの？」
カルノ
「奇跡の場面を再現するんだ　スタジオに並べられた植木鉢のジンチョウゲの木　金魚鉢の金魚　鳥籠の文鳥　セントバーナード犬　手長猿　そして　ポニーと漬物石……そいつら全部と　話して　歌って　踊るんだ」
ペケレ
「できないわ」
カルノ
「（鞭で打ち）ええい　この餓鬼め　黙っていればいい気になりやがって」

手下1
「カルノ首領　そろそろ　テレビ局にでかける時間ですぜえ」
ペケレ
「(泣いて)そればっかりは　できないわ」
カルノ
「(ふたたび鞭で打ち)糞！　餓鬼め　出演料は　たっぷりと前金で　この俺様がもらってあるんだ　ごねたって　そうはさせねえ！」
暗転
ナレーター
「テレビ局のスタジオは　おもちゃの箱をひっくりかえしたような大騒動でした」
明転
テレビ局のディレクター
「(カルノ一行を遮り)おっとっと　みなさん　わたしはディレクター　ここから先はご遠慮下さい　スタジオにはいれるのは　出演者だけなのですよ」
カルノ
「ふん　まあ　仕方ねえ　だが　あの餓鬼を逃がしたら　おめえのどてっぱらに　自動小銃の弾を百発もぶちこんでやっからな(去る)」
テレビ局のディレクター
「(首をすくめ)自動小銃の弾を百発か　消化不良で下痢ですよ(ペケレに)さあてと　ペケレちゃん……でしたな　まず　リハーサルといきましょうか」

ペケレ
「あの　ほんとうに　テレビで？」
テレビ局のディレクター
「もちろん　もちつき　ぺったんこ　なにしろ　莫大なギャラを　しかも　前金で　しかも　手の切れるような一万円札の現金で　ぴしゃっと　こう　支払ってあるのですからなあ」
ペケレ
「ね　ディレクターさん　お願いです」
テレビ局のディレクター
「できません」
ペケレ
「あああああ（失神して倒れる）」
テレビ局のディレクター
「（大慌てで）あ　死んじまう　テレビにうつさないうちに死んじまう（大声で）だれか　助けてくれえ」
若者
「（鳥打帽をかぶり　ひげとサングラスをしてあらわれ）どうしたんですか？」
テレビ局のディレクター
「だれかね　君は？」
若者
「きょう　入ったばかりの小道具係りですが　多少　救急看護の経験があります　楽屋にはこびましょう（ペケレを横抱きにし　ディレクターに）あ　わたしが楽屋にはこぶまに　あなたは　冷たい水とタオルを大至

急」

テレビ局のディレクター

「はいはいはい　冷たい水とタオルですな　冷たい水とタオルの出前屋さんは電話帳にあったかなあ（去る）」

若者

「（ペケレの耳もとで）しっかりしろ　ペケレ　ぼくだよ　カルノジュニアだよ

君を奪いかえしにきたんだ　さあ　楽屋の裏口から　そっとぬけだそう（去る）」

暗転

ナレーター

「さすがは　カルノジュニア　息を吹きかえしたペケレの手をひき　大都会の　迷路のような

路地から路地を逃げまわり　いつしか　街はずれの公園にさしかかったのでした」

溶明

陰うつな音楽

老人たち

「（ぼろをまとい　うちひしがれて　歌う）

腹へった　わしらは　お年寄り

パンを買う金もない

わしらは　貧しいお年寄り

寒くっても　手をあぶるストーブもなく

雪が降っても　逃げこむ家もなく

野良犬のようにうろつく

わしらは
あわれなお年寄り」
不良少年たち
「（手に手に棒をもってあらわれ　残忍に歌う）
俺たち　ハンター
鉄のパイプで
老いぼれ犬を襲って殺す
俺たち
この街のハンター」
不良少年の群れ　老人の群れを襲う
悲鳴をあげて逃げまどう老人たち
カルノジュニア
「（ペケレとともにかけつけ大声で）やい　てめえら　不良少年ども　やめろ　やめないと　このカルノジュニアがゆるさねえぞ」
不良少年たち
「（ひるみ　口々に）えっ　カルノジュニア　あの国際ギャング団の　カルノ首領の後つぎだ
こいつあやばい　畜生　おぼえていろ（去る）」
カルノジュニア
「（老人たちをいたわり）もう　大丈夫ですよ　おじいちゃんたち　これからは
ぼくが守ってあげますから――」

（七七）

老人たち
「(口々に) ありがとうございます　カルノジュニア」
ペケレ
「よかったわねえ　おじいちゃんたち　これからは　わたしも　はたらいて　パンをもってきてあげるわ」
老人たち
「(口々に) ありがとう　あんたはペケレだね　新聞にでていた　あの　不思議な力をもった女の子だね
　写真でわかるよ　ありがとう」
ペケレ
「(上着をぬいでひとりの老人に与え) これ　着て下さいな　おじいちゃん」
老人1
「(うけとり　泣いて) ありがとう　ペケレ　ほんとうに　あんたは　心のやさしい子だよ」
カルノジュニア
「(上着をぬいで　別の老人にわたし) じゃあ　ぼくも」
老人2
「(うけとり　泣いて) ありがとう　カルノジュニア　あんたの父親が　国際ギャング団の首領だなんて
　とても　信じられないよ」
カルノジュニア
「ぼくは　いま　クリーニング店ではたらいています
　ペケレが　ぼくに　決心させたんです」
ペケレ

「カルノジュニアは　もともと　心が　星の光でいっぱいなんです」
老人3
「心って星空なんじゃ　やさしいおもいや　親切な考え　いたわりの気持ちは　みんな
　心の空にまたたく星なんじゃ」
カルノジュニア
「（空を仰ぎ　歌う）
　心の空を
　憎しみの雲や
　いさかいの嵐で
　くらくしないでおこう
　ぼくら
　いつも
　心の空に
　おもいやりの星……親切の星……いつくしみの星を
　いっぱい　いっぱい
　光らしておこう
　ぼくら」
　　星の光　空にみちあふれる
　　うつくしい音楽
ペケレ　カルノジュニア　老人たち　シルエットとなってゆれる

（七九）

突然　不吉な旋律
遠くからトラックの爆音
みるみる近づき
強烈な赤の光　明滅しはじめる
ペケレ
「国際ギャング団だわ　カルノジュニア　逃げて　でないと　あなた　まっさきに　自動小銃で射たれるわ」
カルノジュニア
「ペケレ　もういいんだ　ぼく　父の手で射ち殺されたってかまわない　だけど　ペケレ　君は逃げて
そして　地球人として　たくましく　生きぬいて」
ペケレ
「（カルノジュニアにすがりつき）カルノジュニア！」
カルノジュニア
「（ペケレを抱きしめ）ペケレ！」
トラックの爆音
急ブレーキ
襲ってくる靴音
銃をふりかざして　国際ギャング団の一味　駈けつける
不良少年たち
「カルノ　こっちですよ」
カルノ

「うぬ　小僧奴」
カルノの手下1
「首領　どっちからぶっ殺します？」
カルノ
「待て　俺が射つ　うぬ小僧奴　ペケレをはなして前にでろ（銃で狙う）」
カルノジュニア
「ペケレ　さようなら（ペケレをふりはなそうとする）」
ペケレ
「（必死にとりすがり）いっちゃあ　いや　カルノジュニア」
カルノ
「（じれて）やい　小僧　おめえも　俺の跡とりなら　女の子にくっついてなんぞいねえで
さあ　男らしく　前にでろ」
カルノジュニア
「（力ずくでペケレをふりはらい）さようなら　ペケレ」
ペケレ
「カルノジュニア！」
カルノジュニア　ペケレからはなれた一瞬　ペケレが全力をふりしぼって
カルノジュニアの前に立ちふさがる
銃声
ペケレ　倒れる

他の全員
「ペケレ！」
カルノジュニア
「（泣いて　倒れたペケレにとりすがり）ペケレ！　ペケレ！」
ペケレ
「（虫の息で）首のペンダントをはずして　カルノジュニア」
カルノジュニア
「（ペンダントをはずし）さあ　ペンダントだよ　ペケレ」
ペケレ
「いっしょにすかしてみて　カルノジュニア」
カルノジュニア
「（ペンダントを虚空にかざし　いっしょにすかしみて）ペンダントの北極を
空の北極星に重ねあわせたよ　ペケレ」
シンセサイザーの音楽　はじめは低く　神秘的におこる
宇宙のさまざまな光芒運動が　多彩な色彩とともに旋回しはじめる
ペケレ
「ありがとう　カルノジュニア　ふたりとも　だんだん　エメラルドのいろに
深く澄みわたったペンダントの宇宙に吸いこまれていくわ」
音楽たかまる
やがて

空にヨット座の十三の星がまばゆく輝く
神秘的なシンセサイザーの音楽にあわせて低くおこる声
母の声
「ペケレ　どうしたの？」
ペケレ
「おかあさん　さようなら」
父の声
「ペケレ　どうしたの？」
ペケレ
「おとうさん　さようなら」
父と母の声
「（絶叫し）ペケレ！　ペケレ！　ペケレ！」
ペケレ
「（息たえだえに　歌う）
いのちは　光
くるしくっても
つらくっても
ぎゅっと
歯をくいしばり
がんばって生きぬけば

いのちは　光」
　ギャング団を除く全員　はじめは低く　やがて　高く響きうたう
「(光と音楽　だんだん　宇宙をおおう)
いのちは　光
かなしくっても
さびしくっても
ぎゅっと
くちびる噛んで
なみだこらえていけば
いのちは　光」
　七いろの光のどしゃぶり　すべてをのむ
　高潮する音楽のまま　幕